

平成 27 年度第 3 回霞ヶ浦自然観察会結果報告

「自然再生地の湿生植物を学ぶ ～自然再生地の遷移と湿生植物の保全」を実施しました。

開催日時：平成 27 年 5 月 23 日（土）9 時 30 分から 14 時 20 分まで

開催場所：土浦市田村 霞ヶ浦湖岸自然再生 A, B 地区

参加者：26 名

今回はセンターに近い自然再生事業 A, B 地区において、自然再生事業施工後の植物の遷移と湿生植物の保全をテーマに観察会を行いました。

今回の講師は、農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所の嶺田拓也先生。水田や湿地の植物では有名な先生です。嶺田先生は、植物の名前の由来や特徴についてユーモアを交えながら終始ご説明して下さい、植物観察のベテランからビギナーまで、さまざまな参加者から説明がわかりやすいと大好評でした。

観察会は自然再生 A 地区からスタートしました。まずは湖面より約 1.5m 上方の堤防上から、A 地区にある池まで堤防の傾斜を下りながら観察していきました。堤防上方では、乾燥した場所を好む植物ばかりでしたが、少しずつ下っていくと徐々に乾燥した場所を好む植物に混じって湿地を好む植物が混生するようになりました。池の水際までいくと湿地の植物が増え、わずかな標高差で植物相の景観が大きく変わることが実感できました。

自然再生 A 地区の湿地帯では、ヨシ、マコモ、ガマなどの代表的な湿生植物をはじめ、ジョウロウスゲやサジオモダカなどの希少種、北方性で茨城県では珍しいドクゼリなども観察されました。

続いて、施工後 2 年ほどしか経っていない自然再生 B 地区に移動しました。攪乱初期の場所には、希少な植物が生えてくる一方、繁殖力の強い外来種も入りやすいとのこと。実際、B 地区ではカワヂシャやジョウロウスゲなどの希少種が観察された一方で、ミズヒマワリなどの繁殖力の強い外来種も見られ、施工後のモニタリングがその後の希少な湿生植物の保全に不可欠なことを学びました。

センターに戻り昼食休憩を取ったあと、研修室において午前中のフィールド観察の振り返りを行いました。参加者全員で確認した植物を上げていき、A 地区で見られた植物、B 地区で見られた植物、両方で見られた植物を縦軸に取り、横軸を水際からの距離によって、水際、やや湿ったところ、乾燥したところ、湿ったところから乾いたところまで広範に見られたものに分けて表に分類しました。また明治維新以前から日本に自生していたものを在来種として黒字で、それ以降外国から移入された物を外来種として青字で記入して区別しました。

その完成した表をみると水際に生える植物は多くなく、乾燥した場所に生える植物が圧倒的に多いこと。また A 地区よりも最近施行された B 地区のほうに外来種が多いことが視覚的に確認できました。また施工後時間が経つにつれて、乾燥したところに生える植物が湿地のほうにも拡散していき、何もしないでいるとだんだん陸地に遷移していくこと、そのため湿地および湿生植物の保全には施工後の順応的管理が重要なことを学びました。

講師の嶺田先生、植物記録と運営に御協力頂いたパートナーのみなさん、そして参加者のみなさん、大変ありがとうございました。

環境活動推進課 福井正人

観察会の様子と観察した植物の一部を御紹介します。



わかりやすい説明の嶺田先生



ジョウロウスゲ



サジオモダカ



ドクゼリ，根元が太ります。



カワヂシャ



午後は研修室で観察した植物について学びました。

観察した植物はおよそ 90 種類でした。